

覚一本平家物語の忠度像

——その歌人的造形——

伊 沢 恵 里

薩摩守忠度という人物は平清盛の末弟で文武両道に優れた人とされている。しかし彼についての史実は少なく、今日のイメージは『平家物語』により形成されたものである。『平家物語』には多くの諸本が存在する。そのうち語り系の屋代本⁽¹⁾、覚一本⁽²⁾、増補系の長門本⁽³⁾、延慶本⁽⁴⁾、源平盛衰記⁽⁵⁾（以下盛衰記）を比較し、歌人としての忠度を探ってみたい。

忠度と和歌

覚一本巻第一の「鱸」には忠度の出生に関して「薩摩守の母是なり」という断定的な一文がある。忠度の母を後鳥羽院の御所に仕えた女房としている。しかしこのような記述は他の諸本には無いことからおそらく虚構であろう。この他、彼の母を熊野十八代別当堪快の娘とする説⁽⁶⁾もあるが、覚一本巻第九に「熊野そだちの大ぢからのはやわぎにて」とあるように、忠度と熊野の結びつきは古くからあったようだ⁽⁷⁾。これはともかく、忠度がこの女房の血を引くことは彼の歌人としての才能の根拠にな

っている。歌道に優れた父忠盛と、「にるを友とかやの風情」でやはりこの道に才能のあつた女房との間に生まれることにより、忠度の和歌の才能は決定的なものとなる。覚一本のこの記述は忠盛の持つ貴族的資質のうち「和歌の分野でこれを具現する役割を、忠度に課した」⁽⁸⁾のである。覚一本の忠度はその血筋をフルに活用して平家歌壇の第一人者となる。

忠度が和歌の才能を持つことを血筋的に裏付けているのは覚一本のみである。平氏の中では彼の兄の経盛、その子経正と並ぶ代表歌人に数えられるが、北川忠彦氏によれば平家歌壇を形成した中心人物は史実では経盛であつたようだ⁽⁷⁾。しかし『平家物語』においては、後に述べるように経盛よりも忠度の方が歌人として完成されている。

忠度は和歌を、『千載集』の撰者として有名な五條三位藤原俊成に就き学んでいた。当時の歌壇は俊成が統率する御子左家と、平安末期以来歌壇の主流を占めていた六条藤原家の対立が見られた。六条家の清輔を中心とするやや閉鎖的な九条家歌壇

に對し、俊成を中心とする開放的な平家歌壇は、技法的には幼いけれども、かえつて明るくあつさりした歌風が行なわれていた。⁽⁹⁾ 忠度、経盛、経正はこのような平家歌壇の代表者であつた。

『平家物語』において歌道に優れた人とされる忠度は、事実勅撰集にも多くの歌が載せられている。「隱名一首を含む十一首の勅撰入集歌数は、平氏歌人としては忠盛（十七首）、経盛（十二首、内一首隱名）に次ぐもので」忠度の歌人としての才能を示している。そしてこれらの歌は千載集以後の勅撰集に入集している。

彼の勅撰入集歌のほとんどを収めたものに『平忠度集』⁽¹⁰⁾がある。この歌集には百一首の歌があり、『平家物語』「忠度都落」にある、「日頃詠みおかれたる歌どもの中に、秀歌とおほしきを、百餘首書き集められたりける巻物」によく似ている。さらに、この『平忠度集』には奥書として、次のような興味深いことが記されている。

右之本者、薩摩守忠度朝臣俊成卿のもとへ遣はし侍りし自筆の本を大樹より出され、兵部卿宗綱卿にかきてまゐらすべきよし仰せらる。然るに予彼の卿の學度に行きて後世の證本に備へむがため、みじかき筆にまかせて寫し留め、よみ合はせ侍りけるとなむ。

文明十六年春三月中の三日

羽林藤原基春

しかしこの文明十六年は西曆一四八四年であり、『平家物語』

の成立はそれよりかなり前、十三世紀前半と推定され、完成が遅いと考えられている覚一本でも一三三〇年頃と考えられている。この奥書の傳承は『平家物語』の影響を受けているのであろう。

『平忠度集』は春、夏、秋、冬、恋、雑の六つに分けられ、そこには師俊成の、あはれ・たけ高し・艶を融合した「幽玄美」の歌風の影響を見る。この歌集の歌は華美なものではなく、さりりと隠かな歌風である。しみじみとしたこれらの歌は、忠度の和歌の才能とその地位を築くに十分なもので、やはり彼が平家歌壇の代表的歌人であつたことを証明している。

忠 度 都 落

忠度の有名な説話「忠度都落」は、源氏に追われ都落ちをする平氏の人々のうち忠度はその途中ひきかえし、師の俊成に勅撰入集を頼んで去つてゆくという話である。ここで俊成と忠度のやりとりは語り系と増補系で異なる。屋代本では、「カ、ル忘形見ヲ給り置候ヌレハ、努々疎略ヲ存マシク候」など入集を約束し、覚一本に至つては、はっきりと「薩摩守悦」てとあるくらい、忠度の安堵がわかる。それに較べ、長門本や延慶本では忠度が巻物を門になげ入れ、俊成の返答のないまま忠度は一人満足して去つてゆく。覚一本のように忠度が安心して去つてゆく時、そこに運命に立ち向い、今はどんなになろうとかまわない、思い残すことはない、と卓越した心境がうかがえる。そ

してこの気持が「前途程遠し、思を鴈山の夕の雲に馳す」というところまで昇華してゆく。

「前途程遠し」というのは藤原公任編集の『和漢朗詠集』の「後江相公、夏夜鴻臚館ニ於テ北客ニ餞スルノ詩序」に、「前途程遠シ、思ヒヲ雁山ノ暮ノ雲ニ馳セ、後会期遙カナリ、纓ヲ鴻臚ノ曉ノ涙ニ霑ス」とあるのを引く。都落ちをすする忠度が前途の困難を思い、全てを口ずさまずとも後に続く「後会期遙カナリ」の別離の悲しみを伝え、俊成を男泣きさせるのだ。

これに較べ盛衰記はこの詩を全文挙げ注釈つきで、奥ゆかしさはあつたものではない。わずかに「後会期遙カナリ」を「後會期無」と詠んだとあるが、覚一本や屋代本などと比べると迫力がなく、かえって拍子抜けしてしまう。

俊成は忠度を哀れと思ひ千載集に読み人知らずとして彼の歌を入れた。屋代本・覚一本・盛衰記は「故郷花」という題で、さゝなみや志賀の都はあれにしを

むかしながらの山ざくらかな

の歌を載せているが、長門本・延慶本はこの他にもう一首「忍恋」として次の歌を載せている。

いかにせんみかきが原につむ芹の

根のみなけども知る人のなき

この場合、俊成が忠度の歌を二首採つたように記しているが、実際には忠度の作ではなく、兄経盛の作であることは『治承三十六人歌合』によって明らかである。意図的に二首を載せたと

しても、覚一本などのように一首に絞つた方が印象深く効果的である。

また、覚一本の出だしが「薩摩守忠度は」であるのに対し、長門本は「其中にやさしく哀なりしことは、薩摩守忠度は當世随分の好士なり」と示す関心度が違う。長門本と延慶本は歌を好んだ忠度の哀れな話を、幾つかの話中の一つとして取り上げているが、覚一本は独立した忠度についての話としている。覚一本は平家一門として滅びの運命に向う忠度像を造りあげ、それがかえって切迫した忠度の和歌への執心を浮び上げさせている。

「忠度都落」の終りに延慶本と盛衰記は「かしがまし説話」という説話を載せている。しかしこの説話は覚一本や長門本では「小袖贈答説話」とともに忠度の東国出立の際にエピソードのようにつけられている。「かしがまし説話」は「小袖贈答説話」というのは、忠度が日頃通っていたある宮腹の女房との和歌説話である。ある時この女房のもとへ行つたところ客人がいて、忠度は待ちくたびれて扇をせわしく使つたところ、この女房が「野もせにすだく虫の音よ」と口ずさんだので帰ってしまった。また、忠度出立のさい、この女房は別れを悲しんで小袖を贈り和歌をかわしたというもの。覚一本などはこの二つの説話を巻五にまとめ、「忠度都落」では後ろによけいなものを付けず、去りゆく忠度の別れの余韻を残している。

忠度の最後

「忠度最後」は一の谷の戦いで忠度が岡辺六野太忠純に討たれるという説話である。なお屋代本は残念ながらこの説話を持つ巻が欠巻となっている。忠度は六野太に討たれた後も素姓が割れなかったが、彼の身元割出の決め手となったのは、覚一本・長門本・盛衰記では「旅宿花」と題した一首の歌に忠度と書いてあったことによる。

行きくれて木の下かげをやどとせば

花やこよひのあるじならまし

一方延慶本には「是はたか頸そと云て人にみすれば、あれこそ大政入道の末弟薩摩守忠度と云し謂人の御首よと云けるこそ、始てさとも知たりけれ」とあり、「旅宿花」については一切触れていない。「延慶本はあまりに写實的に描きすぎて、和歌を挿入する余地がなくなってしまう」のであろう。

「旅宿花」のいきさつは有名で、世阿弥の謡曲『忠度』にも題材として用いられている。この歌は戦場にありながら、ささやかな風流を味わいたいとする、根っからの歌人である忠度を描き、この歌は『平家物語』の忠度を歌人として退場させる花道であった。

覚一本はこの「忠度最後」の段を抒情性たっぷり、歌人忠度を打ち立てて終っている。盛衰記は和歌のあと簡略に忠度を紹介し、そのあと長門本や延慶本と同じく六野太の恩賞話となる。「忠澄、兵衛佐殿の見参に入て薩摩守の年来知行の所五ヶ所ありけるを忠澄に給けり」とある。

いったいこの説話において主人公は誰か？と聞けば、長門本や延慶本においては忠度と言い切れない。登場から覚一本が「薩摩守忠度は」と始まるのに対し、長門本や延慶本は一騎落ちてゆく武人がいる、と距離をおいている。戦いぶりからしても忠度を好意的に扱ってはいず、結末は六野太の功名譚のようである。描写の点から見ても、長門本や延慶本は非常に生々しく、忠度が武士くさく、歌人としての繊細さはない。これは歌人としての要素が入ってこないことにもよるが、全体的に忠度を一人武人としか扱っておらず、彼の人間性や個性を描こうという姿勢が窺えないことにもよる。

それに比べ覚一本はここで完全な「忠度説話」を形成している。武人としてのいきさつは爽快感さえ与え、歌人としての鋭い眼と豊かな感受性を持つ人物と想像させる。そのような忠度とは対象的に六野太は非常に無神経な人物に映り、せつかくの手柄も彼の名をあげるものではなくなっている。

もつとも、覚一本の抒情的に完成された美しさには遠く及ばないが、しかし長門本の粗野で客観的な所は長所でもある。一方、盛衰記は盛りだくさんの話が内容を浅くしている。

この他の和歌説話

忠度の詠んだ和歌は諸本により非常に流動的である。特に注目すべきなのは、覚一本には存在しない次の二首である。

ハカナシヤ主ハ雲井ニワカルレハ

宿八煙ト立千ノホルカナ

古郷を焼野の原にかへりみて

末も煙の波路をぞゆく

「ハカナシヤ」の歌は平家が都落ちをする際、忠度が詠んだとして屋代本・延慶本にある。しかしこの歌は盛衰記では経盛が詠んだことになっている。「古郷を」の方はやはり都落ちの際に忠度が詠んだものとして盛衰記にある。しかし屋代本では経盛が、延慶本では左馬守行盛が詠んだことになっている。この二つの和歌はへかしがまし説話などと同じく、もとはいずれかの説話であつたものを、後に忠度詠むとしたものであろう。ここでは覚一本の「整理」に注意しておきたい。

また、九州に落ちた平家の人々は九月十三夜に月見をし、都を様々に思い歌を詠む。忠度は、

月を見しこぞのこよひの友のみや

宮こにわれをおもひいずらむ

と詠む。この歌はすべての伝本に存在するが、歌つた場所や、この時他に歌を詠んだ人や、その順番は諸本によって多少異なる。しかし忠度のこの歌は彼の作としていずれの諸本でも月見の際の一番先に取り挙げられている。「平家物語」における歌人忠度像が比較的早くから形成されていたことがわかる。

この他諸本によって独特な説話もある。長門本卷三の「小松殿被レ諫レ父事」という段には忠度がワキ役で登場する。この説話自体は他の諸本にもあるが、忠度の登場するのは長門本の

みである。これは清盛の法皇幽閉を重盛がいさめる話で、忠度は重盛の弁護と清盛の説得をし、二人の和解に手をかした。これだけの話だが、ここには忠盛と兄清盛、年上の甥重盛との関係が見え、忠度は情深く主従の理や人の道に明るい人の印象である。他の諸本のこの段には彼の名が見えないところから、忠度の登場は増補なのであろう。しかし一見イメージアップを図つたようであるが、清盛の態度や話の進み具合を見ると彼の登場は無用のものである。

もう一つ盛衰記には「忠度名所々々を見る附難波ノ浦賤ノ夫婦の事」という段がある。一度は九州に落ちながら勢力を取り戻し福原へ戻つた平家の人々のうち、忠度は摂津国の名所を見て回る。山はどこそこ、河は、関は、島はと見て歩く。敵の追いつけない隙をみて名所を巡り、それを書き留めて忠度は福原へもどつてゆく。戦いの過中にありながら風流を忘れることのなかつた忠度を描いている。また彼は名所の中で特に「難波浦をよしとするのも古事ゆえ」と言っており、忠度を古に思ふを馳せる風流人であつたとしている。しかしこの段はほとんどがこの難波の夫婦の説話であり、確かに興味深い話であるが、忠度のこの名所見物はこの説話に後でつけられたものだろう。

まとめ

忠度の説話の諸本による比較を試みてきたがこのへんでまとめてみたい。

『平家物語』において忠度は非常に流動的な位置にある。これはもともと彼自身から彼のために生まれた説話が少ないからである。もと叙事的文学と言われる『平家物語』において抒情性に富むのが忠度説話である。彼を理想忠度像として完成させるために様々な説話が生まれたとも考えられる。そしてこれらの説話は、題材となった原説話からはつきりと忠度の説話になつたものである。

覚一本において忠度は文武両道に優れた人物とされながら、武人忠度の形成は歌人のそれには遠く及ばない。それは武人忠度を作り上げるための説話が十分でなかつたためである。彼の武勇譚は「忠度最後」だけである。あとは名前を連ねるだけの出陣の記事が多かつた。これはもとになる説話、もしくは彼をあてはめることができそうな説話が少なかつたのだろう。

反対のことが覚一本以外の諸本における歌人忠度の形成について言える。つまり和歌説話において話の種は数々あれど、それをみだりにばら蒔いたため、消化しきれなくなつたのである。延慶本、盛衰記などは和歌説話を六話以上持つているが覚一本ほどすんなり受け入れられる説話は少ない。特に盛衰記における忠度像は様々な記事の寄せ集めで、統一性を見せない。

『平家物語』の中で覚一本の完成度の高さは今まで述べてきたことで明らかにしてきたつもりである。覚一本までの諸本はそれぞれに影響しあい様々な形を見せてくれたが、覚一本ほど洗練されたものはなく、『平家物語』の形成は覚一本において

終了したと言える。また歌人としての忠度も覚一本においてその人物像が達成されたと考えられる。

注

- (1) 『屋代本平家物語』上・中・下 (昭45 桜楓社)
- (2) 日本古典文学大系『平家物語』上・下 (昭34 岩波書店)
- (3) 『長門本平家物語』 (昭49 名著刊行会)
- (4) 『応永書写延慶本平家物語』 (昭52 勉誠社)
- (5) 『源平盛衰記』 (昭50 藝林舎)
- (6) 『平家物語研究事典』市古貞次編 (昭48 明治書院)
- (7) 「忠度像の形成」北川忠彦 (『国学院雑誌』昭50・9)
- (8) 『平家物語』の和歌・管絃話―その位置による意味― 鷹尾純 (『文学研究科紀要別冊2』早稲田大学大学院)
- (9) 「平家物語(六)忠度の最後」市古貞次・山下宏明 (『国文学解釈と鑑賞』昭42・11)
- (10) 『平忠度集』 (国歌大系第十四卷 近古諸家集全 講談社)
- (11) 『平家物語の基礎的研究』渥美かをる (昭37 三省堂)
- (12) 「平家物語延慶本の本文について―忠度最後をめぐって―」松原智子 (『国学院雑誌』昭48・7)